

第2章 第24次調査（藤井節郎記念医科学センター新営地点）

第1節 調査の概要

1. 調査にいたる経緯

蔵本キャンパスのほぼ中央部に位置する地点に、藤井節郎記念医科学センターを2012年度に建設する計画が提出された。建設予定地の周辺には、弥生時代前期の水田が検出された第17次調査地点（中央診療棟新営地点）、第19次調査地点（医学系総合実験研究棟Ⅱ期改修地点）が位置する。そのため、予定地の範囲でも、それに関係する遺構・遺物の広がり予測された。そこで、調査員2名が担当して、約5か月間の予定で発掘調査を実施することとなった。調査面積は約1800㎡である。

2. 調査体制と期間

調査体制と期間は以下のとおりである。

調査主体 国立大学法人徳島大学埋蔵文化財調査室（室長・中村 豊）

調査担当 中村 豊
遠部 慎（埋蔵文化財調査室・助教）

調査補助 中原尚子・板東美幸・前田千夏・山本愛子（以上、施設マネジメント部・技術補佐員）

調査期間 2011年10月7日～2012年3月14日



第3図 作業風景

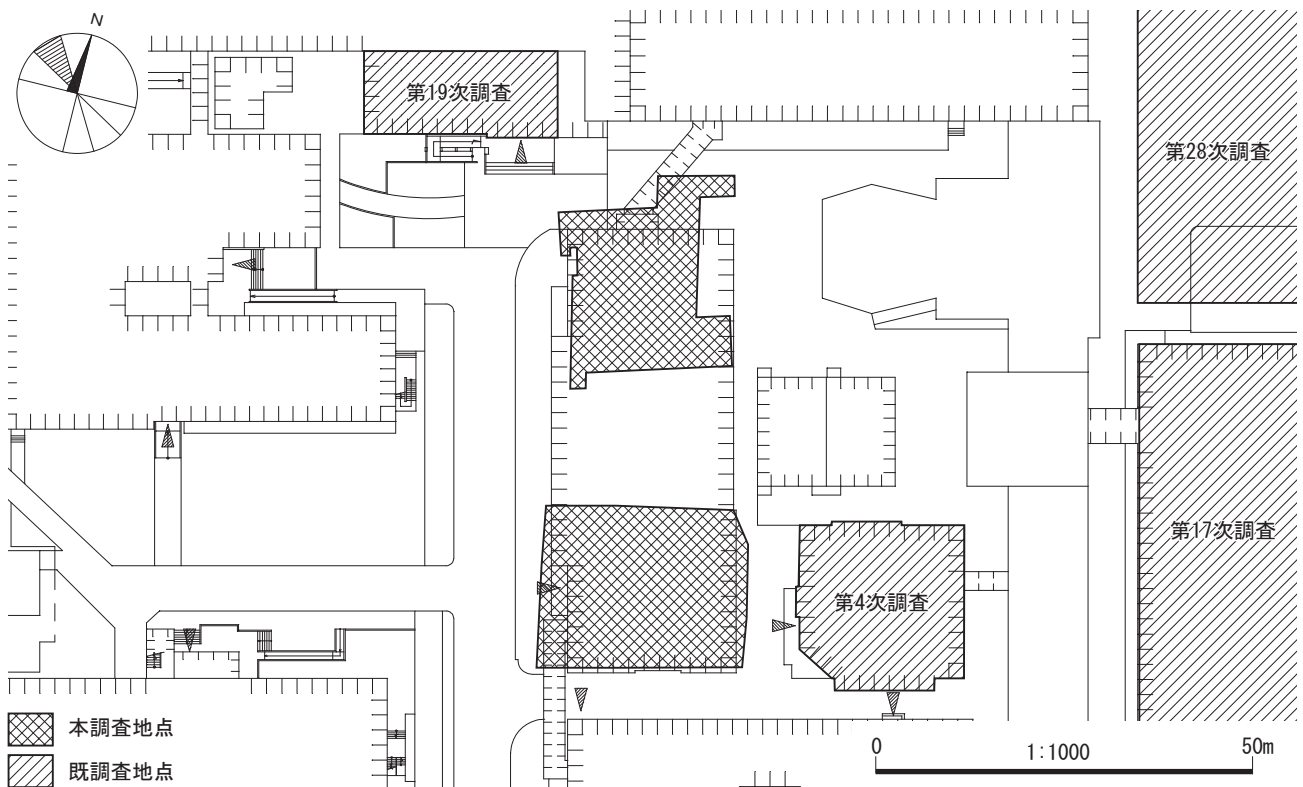
3. 調査地点の位置と区割り

(1) 調査地点の位置

本調査地点は、徳島大学蔵本キャンパスの中央部に位置する（第5図）。北西側には弥生時代前期の水田が検出された第19次調査地点（医学系総合実験研究棟Ⅱ期改修地点）、東側には近代の水田に伴う暗渠が検出された第4次調査地点（医学部臨床講義棟新営地点）、弥生時代前期の水田、破鏡（異体字銘帯鏡）などが検



第4図 現地説明会風景



第5図 藤井節郎記念医科学センター新営地点の位置

出された第17次調査地点（中央診療棟新営地点）、弥生時代前期の水田が検出された第28次調査地点（外来診療棟新営地点）がある。

(2) 調査地点の区割り

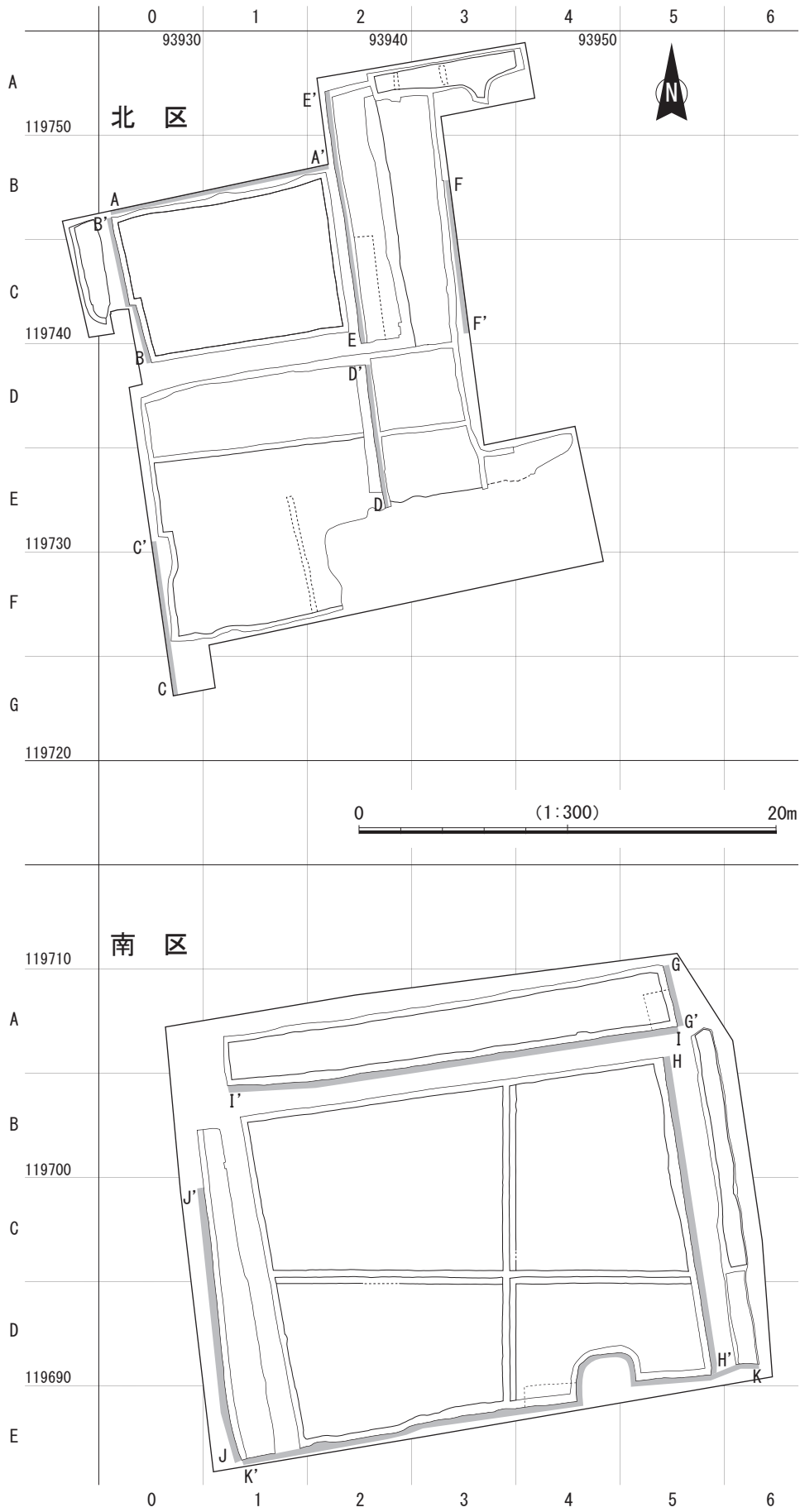
調査にあたっては、建設予定地の北側の掘削範囲を「北区」、南側の掘削範囲を「南区」と呼ぶこととした。そして、それぞれの地区について、調査区外の北西側に原点をとり、南北軸を真北に合わせ、5mグリッドを設定した（第6図）。

4. 調査の概要

本調査地点では、3面の遺構面が調査され、弥生時代Ⅰ－2様式～中世の遺構が確認された。以下、遺構面ごとにその概要を述べたい。なお、第1遺構面と第2遺構面とでは、検出された遺構に明瞭な時期差を認めることができなかったため、両者をまとめて報告する。

(1) 第3遺構面

本遺構面では、弥生時代Ⅰ－2様式の水田畦畔と、弥生時代Ⅰ－3様式～中世にかけての一時期のものと思われる土坑3基、不明遺構1基が確認された。水田畦畔は北区・南区の全域で、大畦畔と小畦畔の双方が確認された。これらからなる水田区画は、東西に長い長方形をなしているが、これは南



第6図 調査地点の区割りと土層断面の位置

区から北区にかけて緩く傾斜する地形に沿って、畦畔が造られた結果と考えられる。土坑・不明遺構から遺物は全く出土していないが、これらの所属時期は埋土からみて、第1・2遺構面で検出された遺構の一部と同時期と考えられる。これらの性格は不明である。

(2) 第1・2遺構面

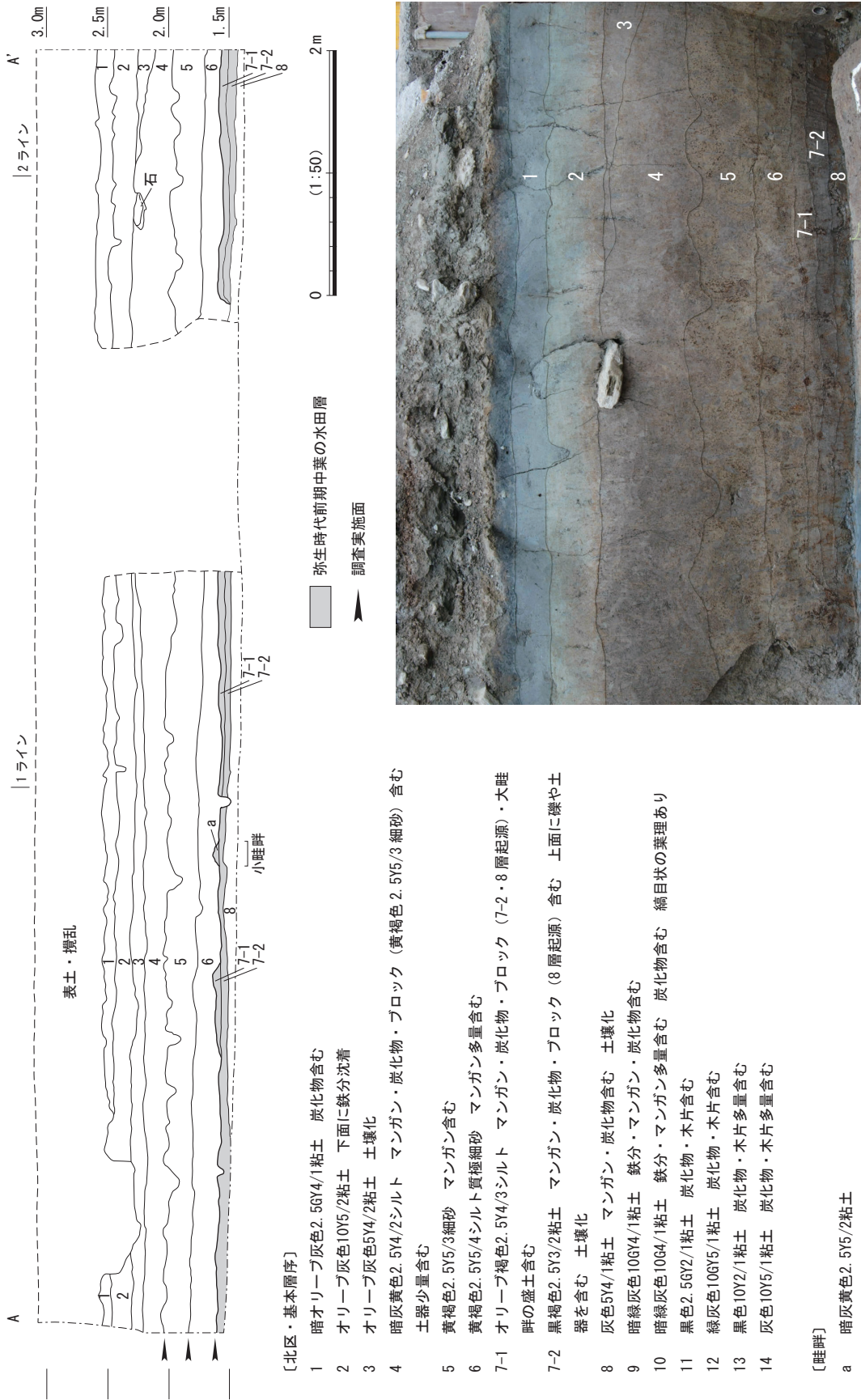
本遺構面では、弥生時代I-3様式～中世にかけての一時期のものとみられる溝6条、ピット1基が確認された。北区で検出された6条の溝は、東西方向のもの（溝1・4～6）、北東-南西方向のもの（溝2）、北西-南東方向のもの（溝3）からなる。このように方向を違え、一部に切り合い関係も認められることから、すべての溝が同時期に展開していたわけではなく、異なる複数の時期に属する溝が混在しているのは明らかである。残念なことに、これらの溝は、出土遺物がないか、あったとしても少量の弥生土器か土師器、須恵器の小片だけであり、正確な所属時期を確定するにはいたらなかった。ピットは遺物が出土していないため、正確な所属時期の確定は困難であり、性格も明らかではない。

第2節 調査成果

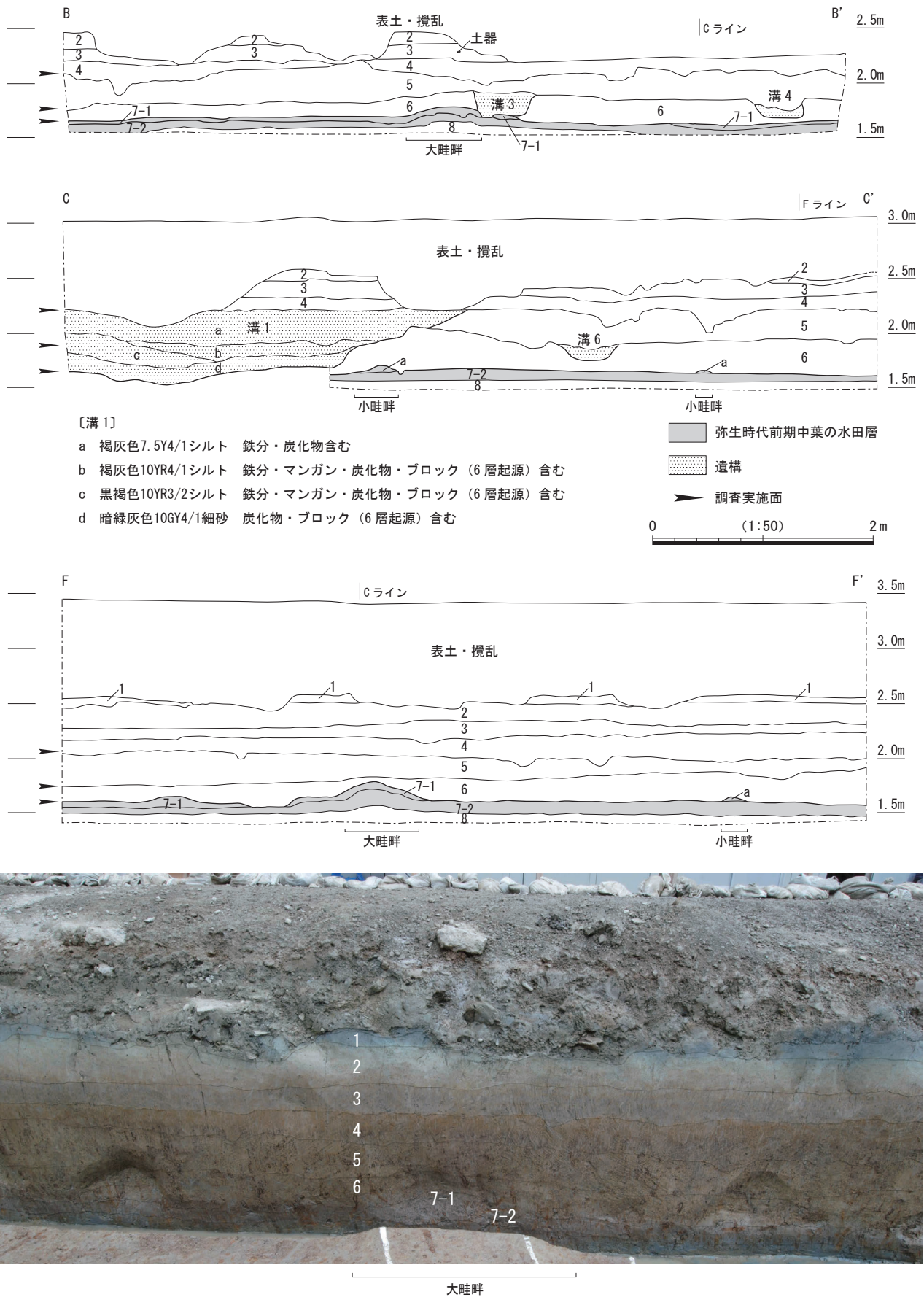
1. 基本層序

本調査地点では、北区で6か所、南区で5か所、合計11か所の土層断面を実測した（第6～13図）。本調査地点の基本層序は大きく14層に分けられる。以下、南区南壁K-K'の土層断面（第13図）にもとづいて詳述する。なお、北区では7層、南区では2層を二つに細分している。現地表面は標高3.3～3.5mであり、そこから標高2.8～3.0m辺りまでは近代以降の造成土となっているが、部分的にそれ以下の標高まで大きく攪乱を受けたところもある。

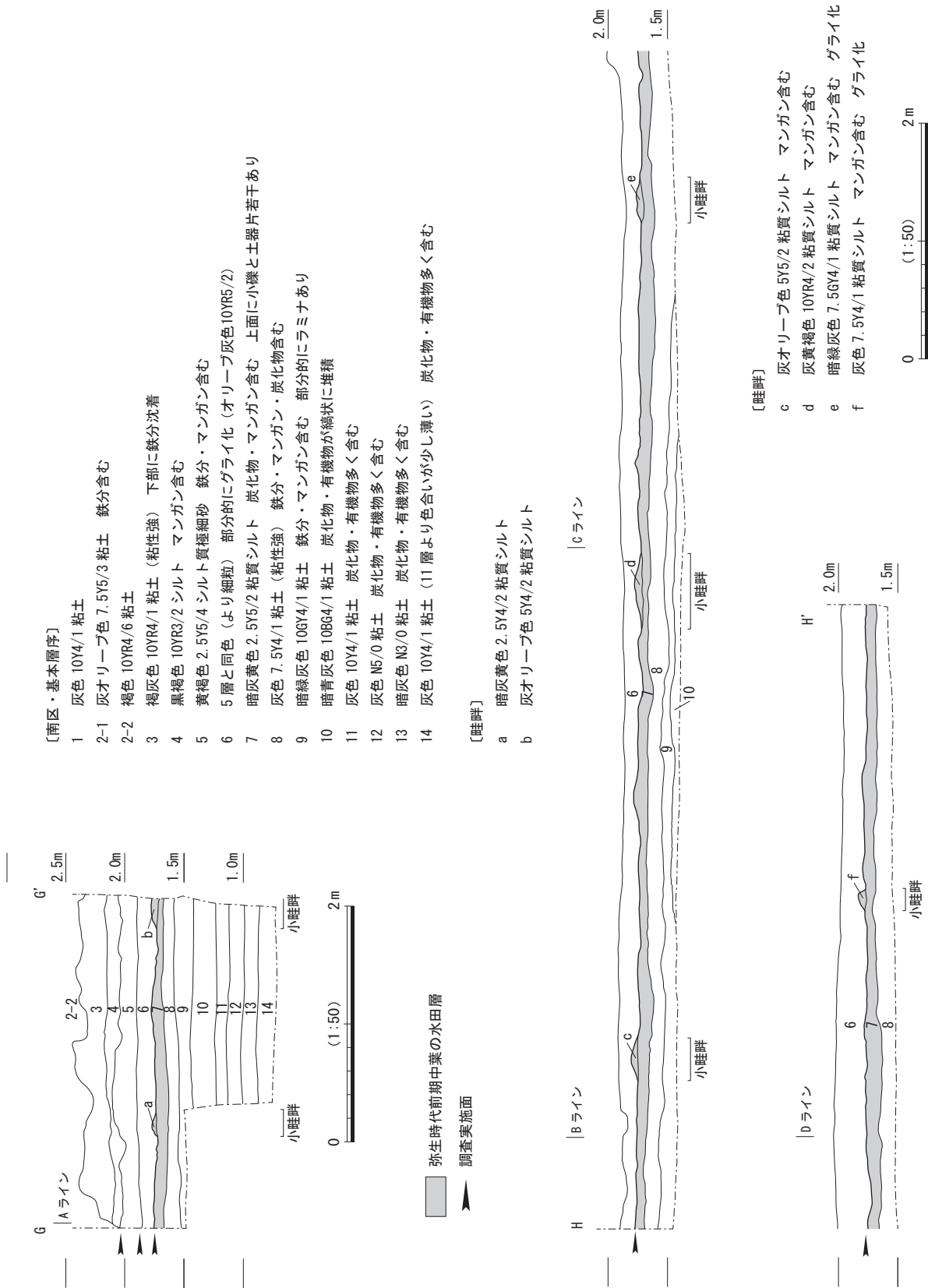
- 1層 灰色10Y4/1の粘土からなる。上面の標高は3.0～2.7m、厚さは10～30cmを測る。近代の水田層と考えられる。
- 2-1層 灰オリーブ色7.5Y5/3の粘土からなる。鉄分を含む。上面の標高は2.4～2.7m、厚さは10～35cmを測る。近代の水田層と考えられる。
- 2-2層 褐色10YR4/6の粘土からなる。上面の標高は2.4～2.7m、厚さは5～20cmを測る。近世の水田層と考えられる。
- 3層 褐灰色10YR4/1の粘土からなる。粘性が強く、下部に鉄分が沈着している。上面の標高は2.3～2.5m、厚さは10～20cmを測る。中世の水田層か。
- 4層 黒褐色10YR3/2のシルトからなる。マンガンを含む。上面の標高は2.1～2.4m、厚さは5～30cmを測る。弥生時代I-3様式～中世の土壌化層と考えられる。
- 5層 黄褐色2.5Y5/4のシルト質極細砂からなる。鉄分・マンガンを含む。上面の標高は1.9～2.2m、厚さは10～30cmを測る。弥生時代I-3様式の洪水砂起源攪拌層と考えられる。上面では弥生時代I-3様式～中世の遺構が検出された。



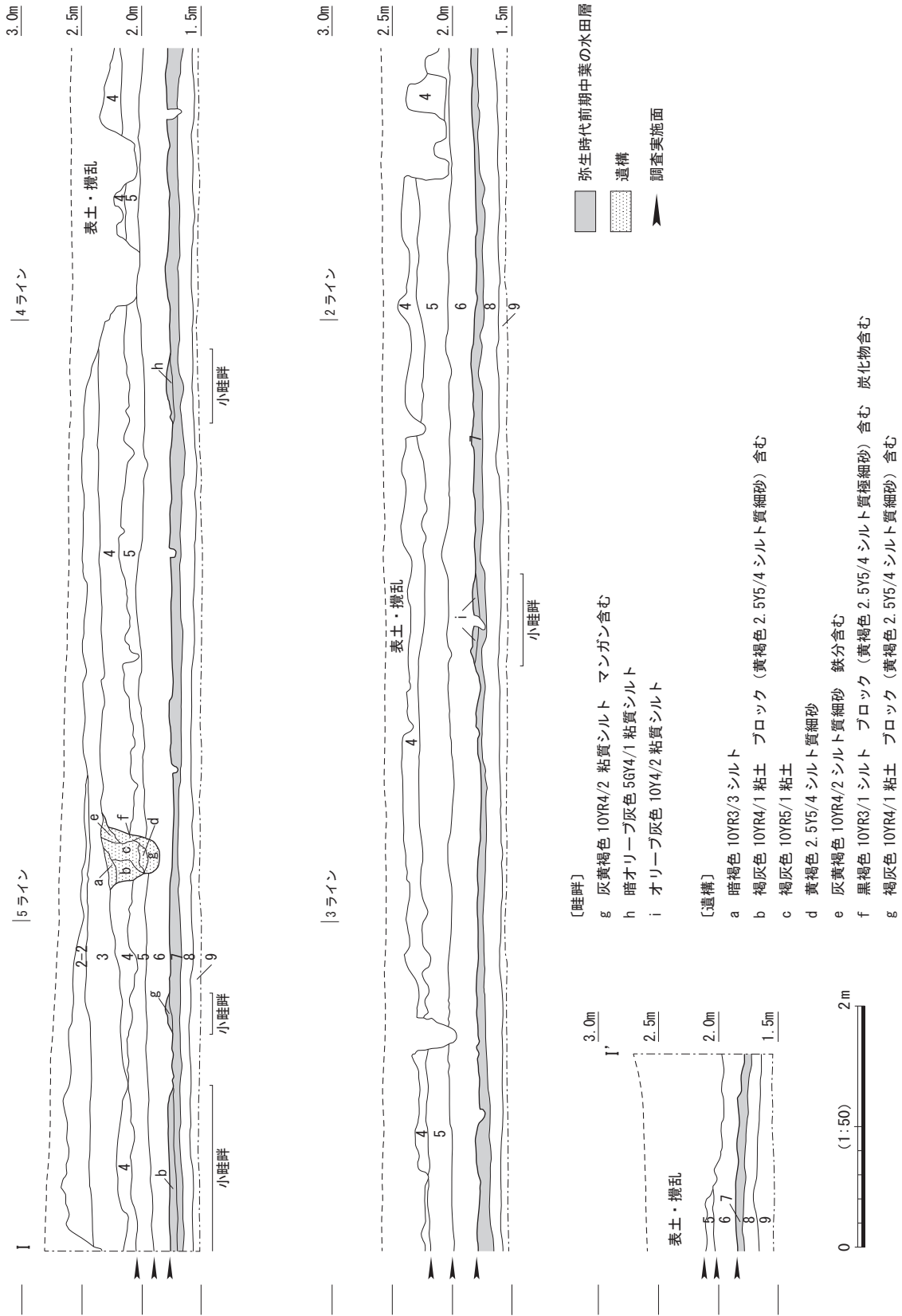
第7図 北区 A-A' 土層断面



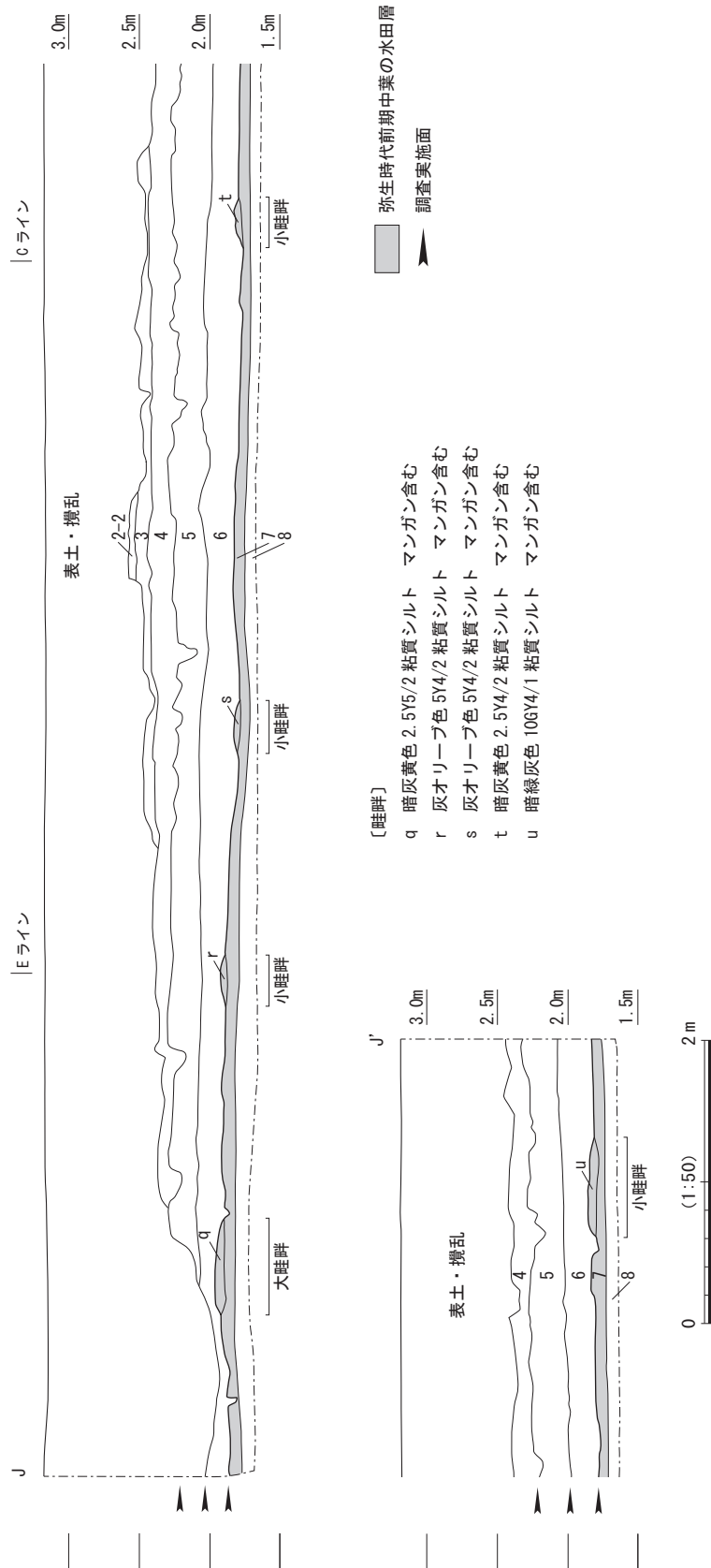
第8図 北区B-B'・C-C'・F-F' 土層断面



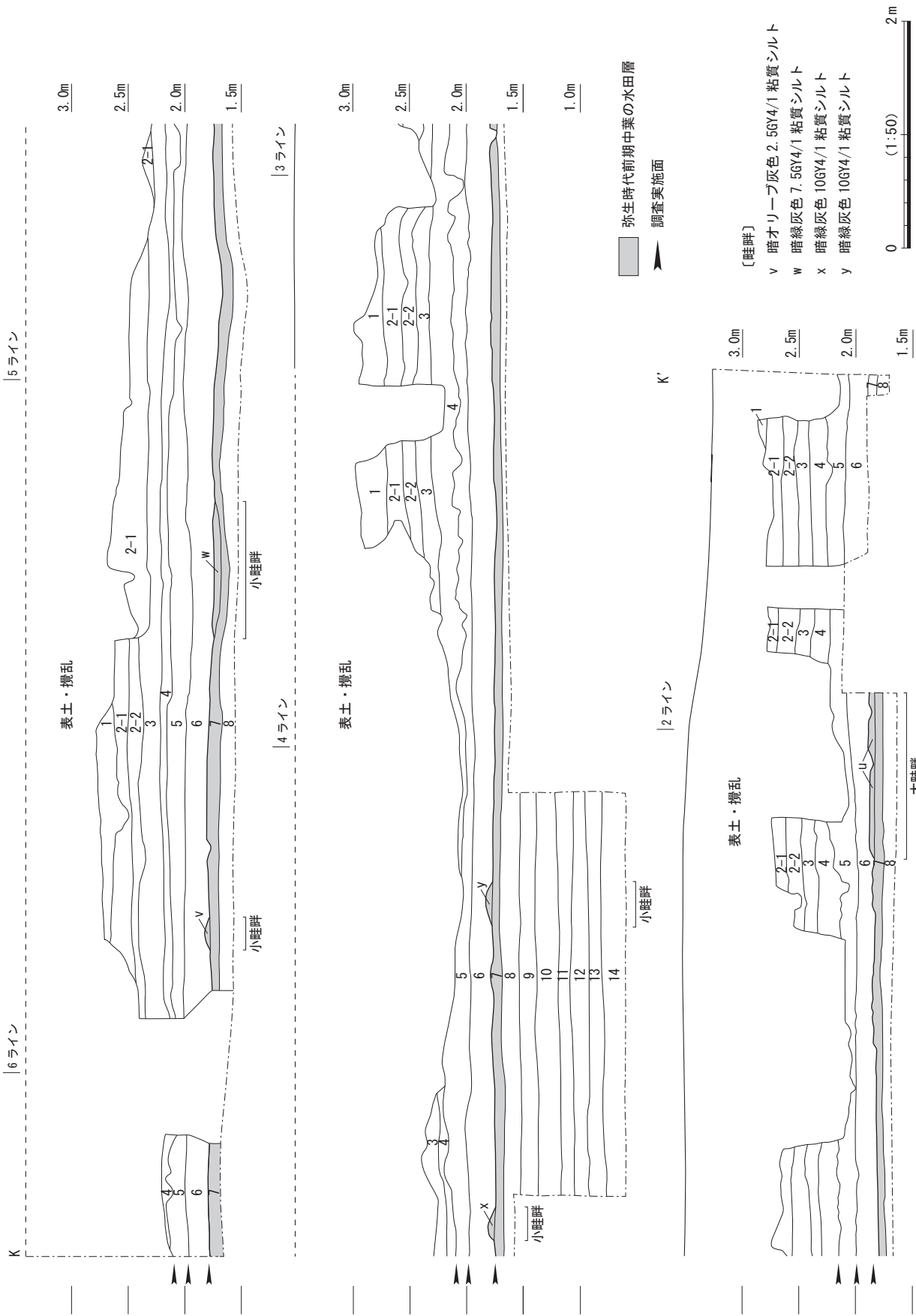
第10図 南区 G-G'・H-H' 土層断面



第11図 南区I-I' 土層断面



第12図 南区J-J'土層断面



第13図 南区K-K'土層断面

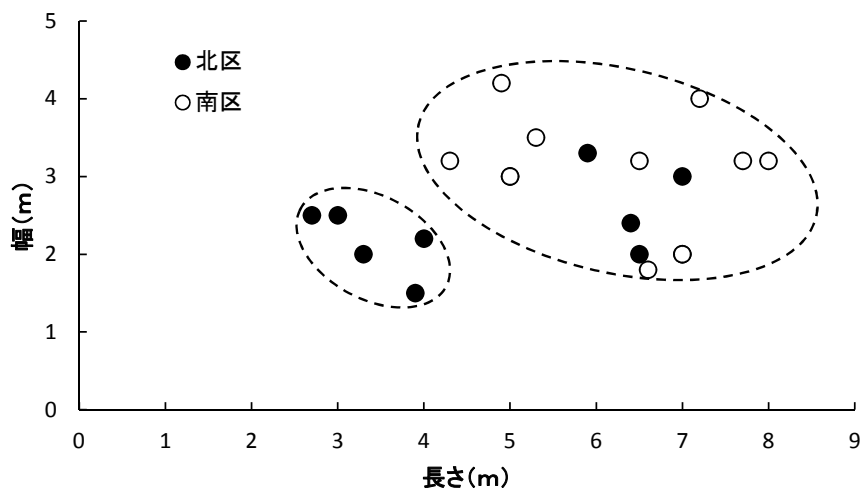
- 6層 5層と同色だがより細粒の砂からなり、部分的にグライ化している。上面の標高は1.9～2.1m、厚さは10～30cmを測る。弥生時代I-2様式の洪水砂と考えられる。
- 7層 暗灰黄色2.5Y5/2の粘質シルトからなる。炭化物・マンガンを含む。上面に小礫と土器片を若干含む。上面の標高は1.7～1.8m、厚さは5～10cmを測る。弥生時代I-2様式の水田耕作土と考えられる。上面では水田畦畔が検出された。
- 8層 灰色7.5Y4/1の粘土からなる。粘性は強い。鉄分・マンガン・炭化物を含む。上面の標高は1.6～1.8m、厚さは10～20cmを測る。縄文時代晩期末～弥生時代I-1様式の土壌化層で、直上層の耕作土の母材と考えられる。
- 9層 暗緑灰色10GY4/1の粘土からなる。鉄分・マンガンを含む。部分的にラミナが認められる。上面の標高は約1.5m、厚さは10～15cmを測る。湿地の堆積か。
- 10層 暗青灰色10BG4/1の粘土からなる。炭化物・有機物が縞状に堆積している。上面の標高は約1.4m、厚さは20cmを測る。
- 11層 灰色10Y4/1の粘土からなる。炭化物・有機物を多く含む。上面の標高は約1.2m、厚さは10～15cmを測る。
- 12層 灰色N5/0の粘土からなる。炭化物・有機物を多く含む。上面の標高は1.0～1.1m、厚さは10～20cmを測る。
- 13層 暗灰色N3/0の粘土からなる。炭化物・有機物を多く含む。上面の標高は約0.9m、厚さは10～15cmを測る。縄文時代晩期初頭の堆積土と考えられる。
- 14層 灰色10Y4/1の粘土からなる。11層よりも色調がやや薄い。炭化物・有機物を多く含む。上面の標高は約0.8mを測る。

本調査地点では、5層上面を第1遺構面、6層上面を第2遺構面、7層上面を第3遺構面として調査を行った。

2. 第3遺構面の遺構

(1) 水田畦畔 (第15～19図、巻頭図版)

北区・南区の全域で水田畦畔を検出した。畦畔は6層の黄褐色シルト質極細砂を掘り下げる過程で検出された暗灰黄色粘土などからなる高まりである。検出された畦畔には大畦畔と小畦畔の二者がある。北区の北半部(C0-3)に位置する大畦畔は、高さ10cm程度、



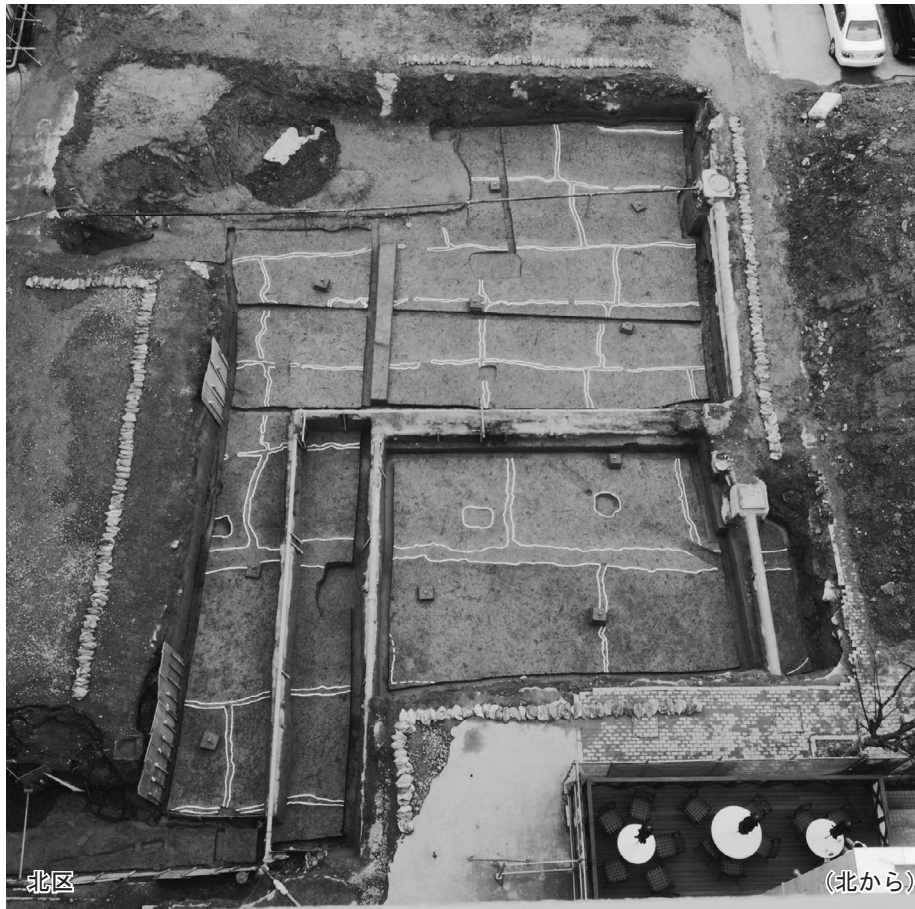
第14図 水田区画の法量



第15図 北区第3遺構面平面図



第16図 南区第3遺構面平面図



第17図 水田畦畔の全景

幅 1.1 ～ 1.8m (底面に近い位置での数値) を測り、東西に 17.2m 分を検出した。南区の南西部 (E1-2) に位置する大畦畔は、高さ 5 ～ 10 cm 程度、幅 0.9m を測り、東西に 4.3m 分を検出した。小畦畔の規模は、高さ 5 ～ 10 cm、幅 20 ～ 80 cm を測る。検出された水田面は少なくとも 53 面以上を数え、一区画の規模は一辺が 1.5 ～ 7.7m、面積は 5.9 ～ 28.8 m² (12 ～ 14 m² が中心) を測る。平面形はすべて長方形であるが、正方形に近い小型の群と細長い大型の群とに分かれる (第 14 図)。小型の群には北区の例が、大型の群には北区・南区両方の例が含まれており、本調査地点では北側に行くにつれ、一区画の規模が縮小する傾向にあることがうかがえる。旧地形は南区から北区へと緩く傾斜していたとみられ、水田区画が東西に長い長方形をなしているのは、こうした地形に沿って、畦畔が造られた結果と考えられる。水田区画の規模を決定づける要因には、自然的条件によるものと社会的条件によるものがあるが (工楽 1991)、この場合は土地の傾斜度合や耕作土およびその直下の土壌状態といった自然的条件によると判断される。

本畦畔の所属時期は、結論から先にいうと、弥生時代 I - 2 様式と考えられる。以下、こうした時期決定にいたった根拠を述べる。畦畔上に堆積した 5・6 層は、弥生時代 I - 2 ～ 3 様式の洪水砂と考えられ、遺物をほとんど含まない。ただし、6 層の最下部と 7 層の最上部から、遺物が少量出土した。これらの遺物を第 26・27 図・図版 1 に示した。このうち、6 層の最下部 (水田面直上) 出土の土器片 (11・12)、7 層の最上部 (水田耕作土) 出土の土器片 (10) は、弥生時代 I - 1・2 様式に属するものであり、本畦畔の時期を示していると考えられる。ほかに、6 層の最下部 (水田面直上) 出土の土器片 (8)、6 層の最下部 (大畦畔直上) 出土の土器片 (15)、6 層 (大畦畔南洪水砂) 出土の石鏃 (17)、6 層の最下部 (水田直上洪水砂) 出土の石鏃 (18)、6 層の最下部 (大畦畔上) 出土の用途不明石器 (19) も、出土状況からみて、これと同時期の所産とみなせる。

以上の時期決定に関わる本調査地点での所見は、これまでの庄・蔵本遺跡の調査で得られた層位学的所見とも矛盾するものではない。第 20 図は、2000 年までの調査所見を総括した中村豊 (2000、pp. 476-477) による基本層序模式図である。この図に示された「暗褐色粘質土層」が本調査地点の 7 層、「黄褐色細砂層」が本調査地点の 5・6 層に対応すると考えられる。そして、「暗褐色粘質土層」の上面では、弥生時代 I - 1・2 様式の遺構が検出されている。こうした所見は、上述した本畦畔の時期決定が妥当であることを後押しする。

(2) 土坑・不明遺構 (第 15・21 図)

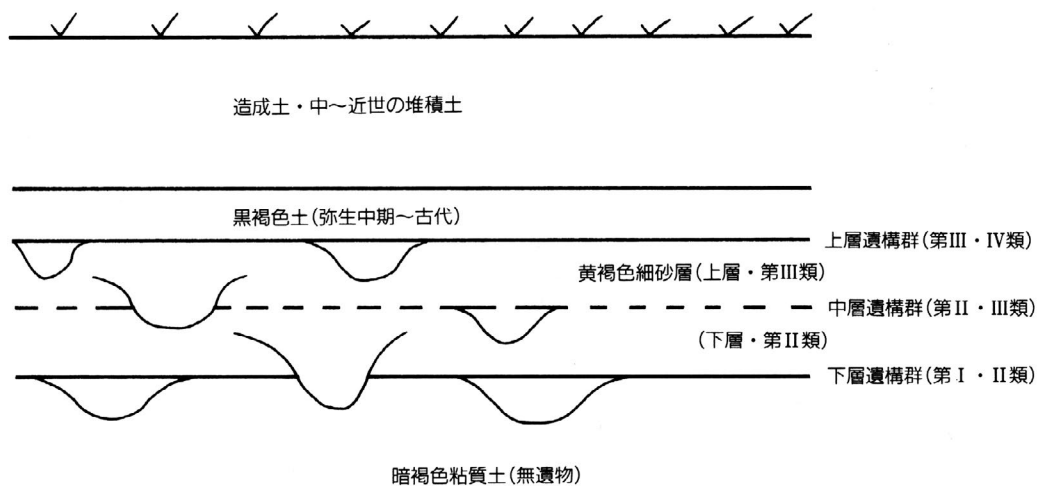
土坑 1 北区の北西部 (C0-1) に位置する土坑である。検出面の標高は 1.65m、底面の標高は 1.45m である。平面形は歪な楕円形、断面形はレンズ形を呈し、長径 0.9m、短径 0.8m、深さ 15 cm を測る。埋土は暗青灰色シルト質極細砂で、礫を含む。この埋土と土坑 2・3 のそれとは類似しており、これらの土坑は同時期のものである可能性が高い。出土遺物はないが、埋土からみて本土坑の所属時期は、第 1・2 遺構面で検出された遺構と同じく、弥生時代 I - 3 様式～中世にかけての一時期と考えられる。



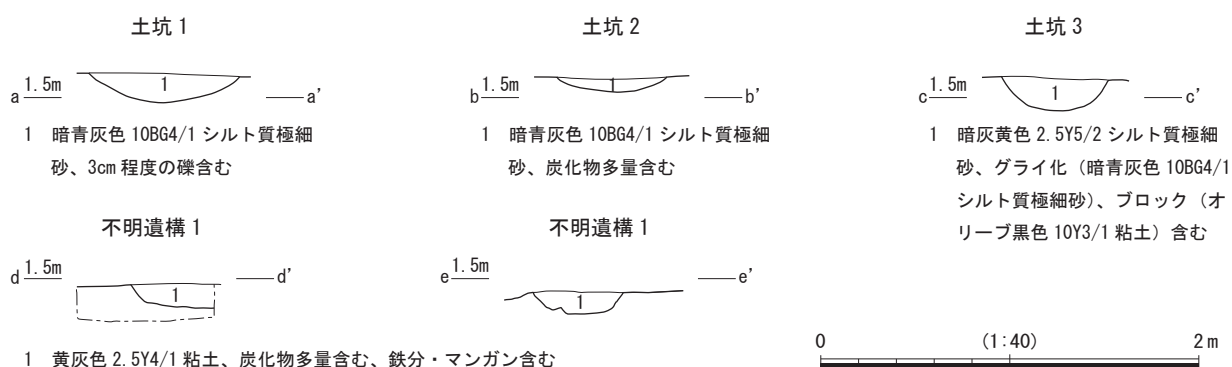
第18図 水田畦畔の検出状況



第19図 水田畦畔に伴う遺物の出土状況



第20図 庄・蔵本遺跡基本層序模式図(中村2000より引用)



第 21 図 遺構の土層断面（第 3 遺構面）

土坑 2 北区の北半中央部（C1）に位置する土坑である。検出面の標高は 1.6m、底面の標高は 1.5m である。平面形は長方形、断面形はレンズ形を呈し、長さ 0.9m、幅 0.7m、深さ 5 cm を測る。埋土は暗青灰色シルト質極細砂で、炭化物を多量に含む。出土遺物はないが、埋土からみて本土坑の所属時期は、第 1・2 遺構面で検出された遺構と同じく、弥生時代 I - 3 様式～中世にかけての一時期と考えられる。

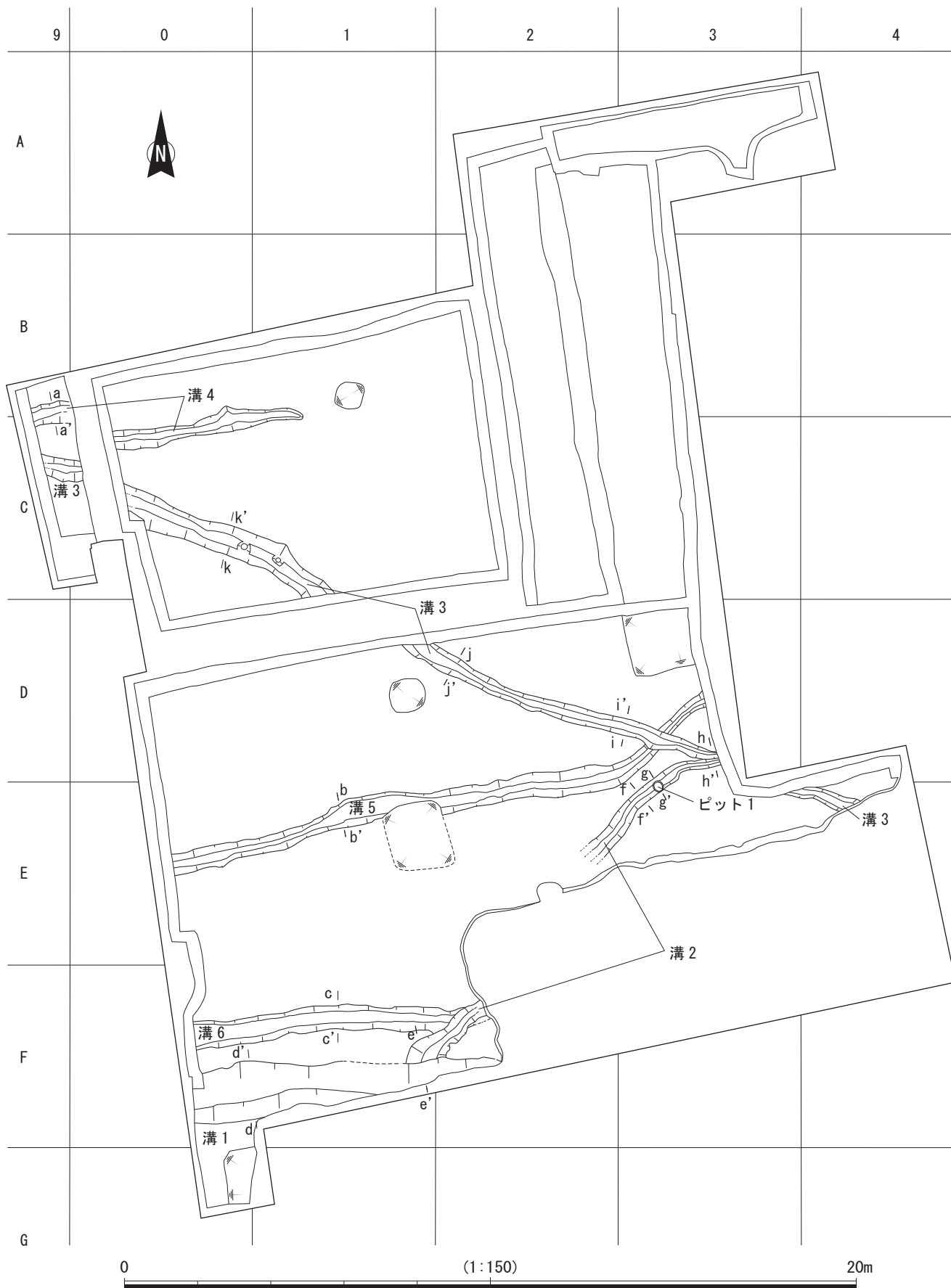
土坑 3 北区の北半東部（C3）に位置する土坑である。検出面の標高は 1.6m、底面の標高は 1.45m である。調査区東壁にかかっており、東半は調査区外へと続く。平面形は方形あるいは長方形、断面形は U 字形を呈し、南北長 0.6m、東西長（検出部位）0.5m、深さ 15 cm を測る。埋土は暗灰黄色シルト質極細砂で、オリーブ黒色粘土のブロックを含む。出土遺物はないが、埋土からみて本土坑の所属時期は、第 1・2 遺構面で検出された遺構と同じく、弥生時代 I - 3 様式～中世にかけての一時期と考えられる。

不明遺構 1 北区の北東部（A2-3）に位置する性格の不明な遺構である。検出面の標高は 1.4～1.5m、底面の標高は 1.3m である。平面形は幅 0.5～0.7m の溝状を呈し、東西に 4.6m 分検出した。断面形は皿形を呈し、深さ 10 cm を測る。埋土は黄灰色粘土で、炭化物を多量、鉄分・マンガンを含む。出土遺物はないが、埋土からみて本遺構の所属時期は第 1・2 遺構面で検出された遺構と同じく、弥生時代 I - 3 様式～中世にかけての一時期と考えられる。

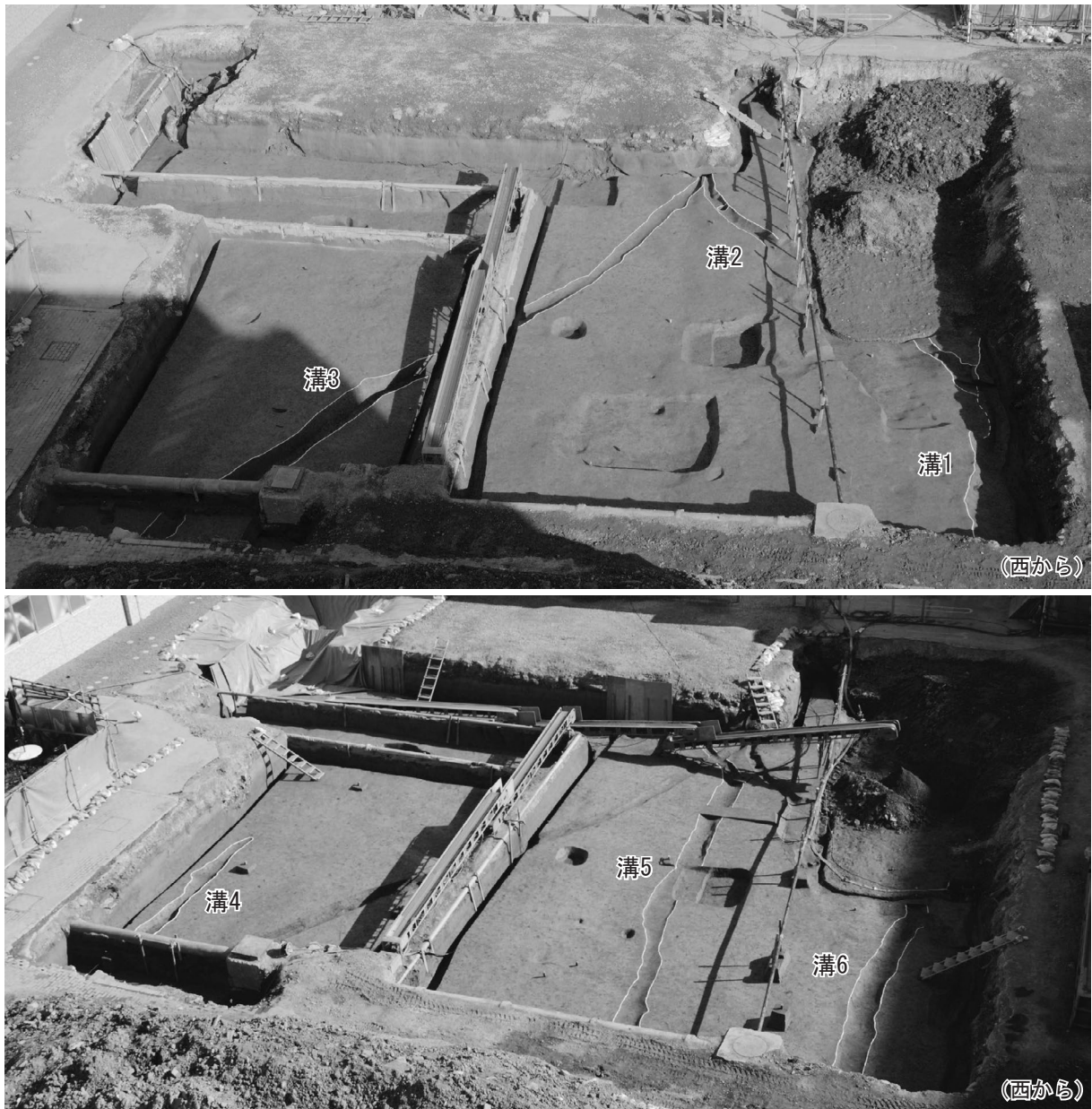
3. 第 1・2 遺構面の遺構と遺物

(1) 溝（第 22～24 図）

溝 1 北区の南西部（F0-2・G0）に位置する溝である。検出面の標高は 2.1m、底面の標高は 1.65m である。幅（検出部位）4.0m、深さ 45 cm を測り、東西に 8.0m 分検出した。断面形は北側に段を有する緩い傾斜からなる。埋土は 5 層からなり、1～4 層は灰色系のシルト、あるいは粘質シルト、5 層は暗オリーブ灰色の極細砂である。溝 2 を切っている。遺物は弥生土器あるいは土師器、須恵器の小片が 10 点以上出土したが、図示し得たのは 2 点である（第 25 図、図版 1）。出土遺物と検出層位からみて、本溝の所属時期は弥生時代 I - 3 様式～中世にかけての一時期と考えられる。

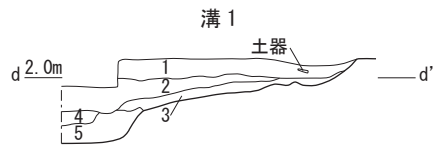


第22図 北区第1・2遺構面平面図



第23図 溝の完掘状況

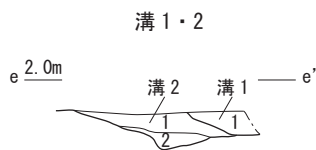
溝2 北区の南東部（D3・E2-3・F1-2）に位置する溝である。検出面の標高は1.85～1.9m、底面の標高は1.65～1.75mである。幅0.3～0.8m、深さ10～20cmを測り、北東－南西に12.0m分検出した。断面形は逆三角形あるいはU字形を呈する。埋土は灰オリーブ色～暗灰黄色の粘質シルトあるいはシルトで、鉄分を含む。溝6を切っている一方で、溝1と溝3に切られている。遺物は弥生土器片が10点以上出土したが、図示し得たのは2点である（第25図、図版1）。2の甕は弥生時代V様式の範疇に収まる。出土遺物と検出層位からみて、本溝の所属時期は弥生時代I－3様式～中世にかけての一時期と考えられる。



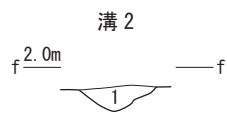
- 1 灰色 5Y4/1 シルト、マンガン・土器片含む
- 2 灰オリーブ色 5Y4/2 粘質シルト、鉄分・ブロック（黄褐色 2.5Y5/6シルト）含む
- 3 2層に同じ、ただしブロックが大きい
- 4 褐灰色 10YR4/1 粘質シルト、細砂混じり、鉄分含む
- 5 暗オリーブ灰色 2.5GY3/1 極細砂、粘土混じり



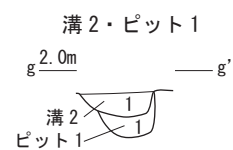
溝1 土層断面 (東から)



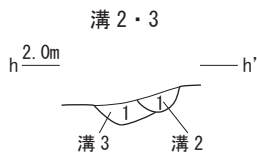
- [溝1]
- 1 灰オリーブ色 5Y4/2 粘質シルト、鉄分含む
- [溝2]
- 1 灰色 7.5Y4/1 粘土、鉄分含む
 - 2 灰色 5Y4/1 粘土、中砂混じり、鉄分・マンガン・土器含む



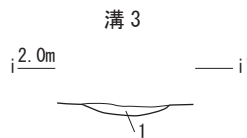
- 1 暗灰黄色 2.5Y4/2 シルト、鉄分含む



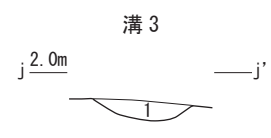
- [溝2]
- 1 暗灰黄色 2.5Y4/2 シルト、鉄分含む
- [ピット1]
- 1 暗オリーブ褐色 2.5Y3/3 粘質シルト、鉄分含む



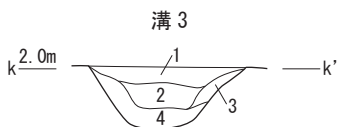
- [溝2]
- 1 暗灰黄色 2.5Y4/2 シルト、鉄分含む
- [溝3]
- 1 黄灰色 2.5Y4/1 細砂、マンガン含む



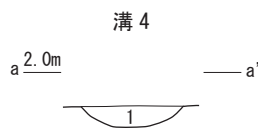
- 1 黄灰色 2.5Y4/1 細砂、マンガン含む



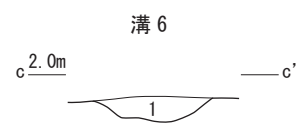
- 1 黄灰色 2.5Y4/1 細砂、マンガン含む



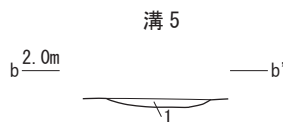
- 1 黄灰色 2.5Y4/1 シルト混じり細砂、鉄分・マンガン含む
- 2 暗灰黄色 2.5Y4/2 シルト混じり細砂、鉄分・マンガン含む
- 3 暗灰黄色 2.5Y5/2 シルト混じり細砂、ブロック（黄褐色 2.5Y5/3 シルト、マンガン含む）含む
- 4 灰色 5Y4/1 中砂、マンガン含む



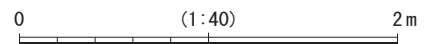
- 1 灰オリーブ 5Y4/2 細砂、マンガン含む



- 1 灰オリーブ 5Y4/2 細砂、マンガン含む



- 1 灰オリーブ 5Y4/2 細砂、マンガン含む



第24図 遺構の土層断面 (第1・2遺構面)

溝3 北区の北西部から南東部（C0-1・D1-3・E3-4）にかけて位置する溝である。検出面の標高は1.8～2.0m、底面の標高は1.7～1.75mである。幅0.3～1.0m、深さ5～30cmを測り、北西－南東に24.4m分検出した。断面形はレンズ形あるいは逆台形を呈する。埋土はk-k'セクションで、4層からなる。1～3層は黄灰色～暗灰黄色シルト混じり細砂で、4層は灰色中砂である。溝5と溝2の一部を切っている。出土遺物はないが、検出層位と埋土からみて、本溝の所属時期は弥生時代I-3様式～中世にかけての一時期と考えられる。

溝4 北区の北西部（B9-1・C0-1）に位置する溝である。検出面の標高は1.8m、底面の標高は1.7mである。幅0.3～0.7m、深さ10cmを測り、東西に7.5m分検出した。断面形はレンズ形を呈する。埋土は灰オリーブ色細砂で、マンガンを含む。この埋土と溝5・6のそれとは類似しており、かつ本溝を含めた3つの溝は東西に平行していることからみて、これらはすべて同時期のものである可能性が高い。出土遺物はないが、検出層位・埋土からみて、本溝の所属時期は溝5・6と同じく、弥生時代I-3様式～中世にかけての一時期と考えられる。

溝5 北区の南半部（D2-3・E0-3）に位置する溝である。検出面の標高は1.85m、底面の標高は1.8mである。幅0.3～0.8m、深さ5cmを測り、東西に15.2m分検出した。断面形はレンズ形を呈する。埋土は灰オリーブ色細砂で、マンガンを含む。溝3に切られている。出土遺物はないが、検出層位埋土からみて本溝の所属時期は溝4・6と同じく、弥生時代I-3様式～中世にかけての一時期と考えられる。

溝6 北区の南西部（F0-2）に位置する溝である。検出面の標高は1.9m、底面の標高は1.75mである。幅0.5～0.8m、深さ10cmを測り、東西に7.9m分検出した。断面形はレンズ形を呈する。埋土は灰オリーブ色細砂で、マンガンを含む。溝2に切られている。出土遺物はないが、検出層位・埋土からみて本溝の所属時期は溝4・5と同じく、弥生時代I-3様式～中世にかけての一時期と考えられる。

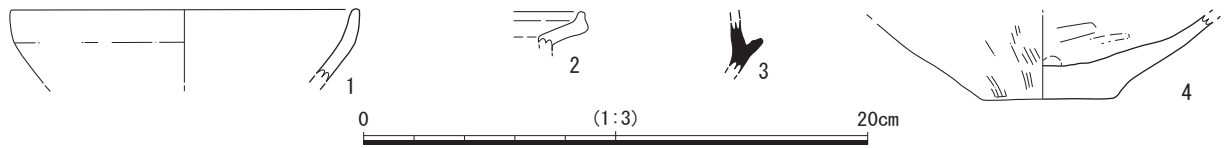
(2) ピット（第22・24図）

ピット1 北区の南東部（E3）に位置するピットで、溝2の底面で検出された。検出面の標高は1.8m、底面の標高は1.65mである。平面形は円形、断面形はU字形を呈し、直径0.3m、深さ15cmを測る。埋土は暗オリーブ褐色粘質シルトで、鉄分を含む。出土遺物はないが、検出層位・埋土からみて、本ピットの所属時期は弥生時代I-3様式～中世にかけての一時期と考えられる。

4. 包含層・攪乱出土遺物

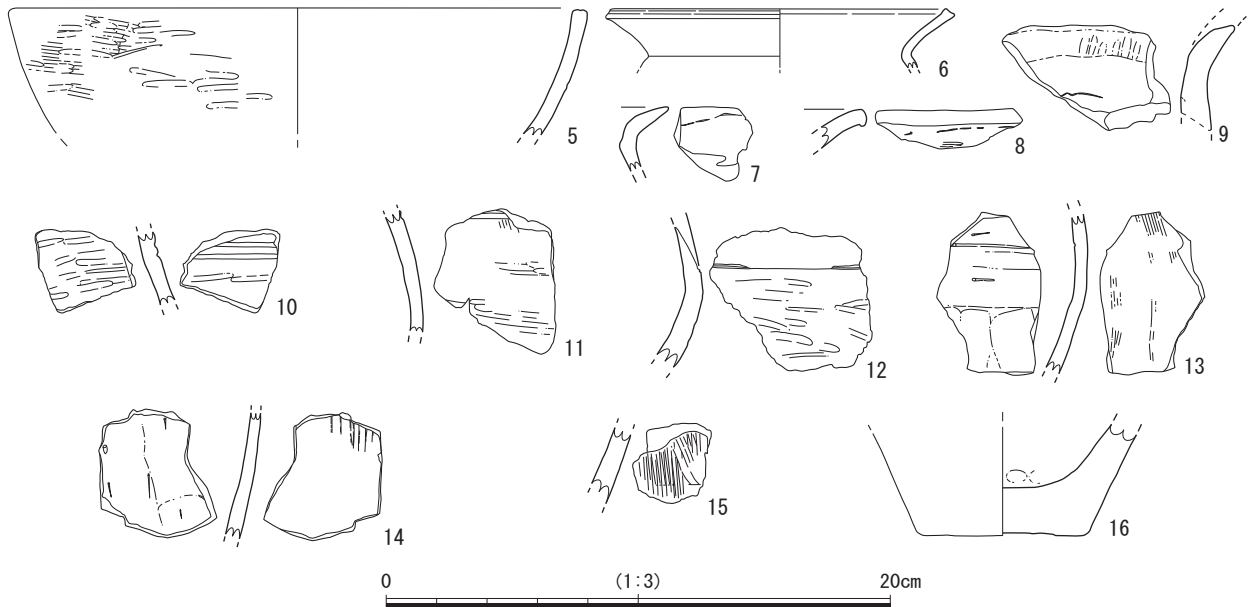
(1) 土器（第26図、図版1）

12点を図示した。5～16はすべて弥生土器である。5はV～VI様式の鉢か高杯の口縁部片である。6はVI様式の甕の口縁部片である。10～12は壺の胴部片である。10～12はI-1・2様式のものと考えられる。7～9・13～16は器種不明で、7・8は口縁部片、13～15は胴部片、16は底部片である。



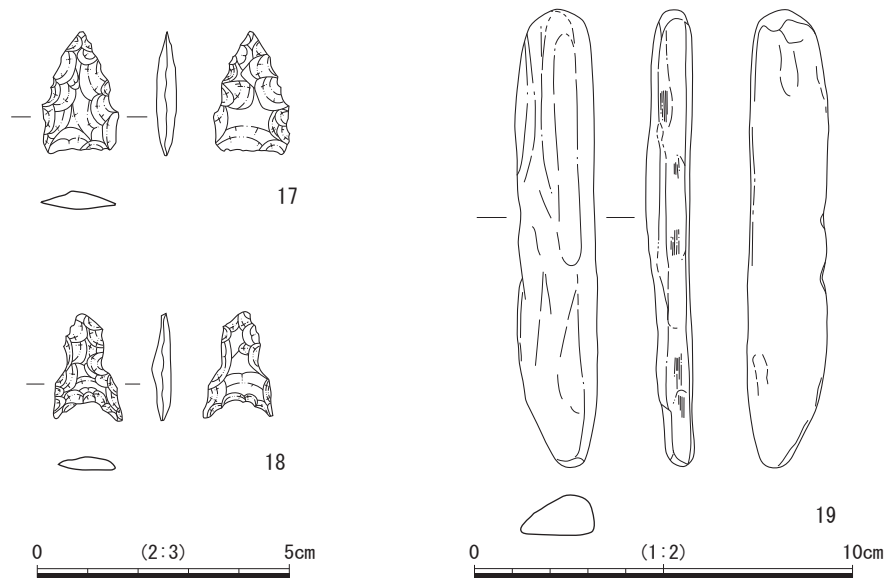
番号	遺構	器種	法量(cm)			調整(外/内)	色調(外/内)	胎土
			口径	底径	器高			
1	溝1	弥生土器/土師器・鉢	13.8	—	—	ナデ/ナデ	橙5YR6/6/橙5YR6/6	微細
2	溝2	弥生土器・甕	—	—	—	ナデ/ナデ	明赤褐5YR5/6/ 明赤褐5YR5/6	微細、石英・長石少量含む
3	溝1	須恵器・蓋杯(身)	—	—	—	ナデ/ナデ	褐灰10YR6/1/ にぶい橙7.5YR7/4	微細
4	溝2	弥生土器・器種不明	—	—	—	ハケメ後ナデ/ナデ・オサエ	にぶい橙7.5YR6/4/ にぶい黄橙10YR6/3	微細、石英・長石・雲母含む

第25図 第1・2遺構面の遺構出土遺物



番号	器種	法量(cm)			文様・調整(外/内)	色調(外/内)	胎土	調査区	層位
		口径	底径	器高					
5	弥生土器・鉢/高杯	23.0	—	—	ハケメ後ミガキ/ナデ	橙5YR6/6/橙2.5YR6/6	細、石英・長石含む	南区C3	5・6層
6	弥生土器・甕	13.8	—	—	ナデ/ナデ	明黄褐10YR6/6/ 明黄褐10YR6/6	微細、雲母少量含む	南区B5	攪乱
7	弥生土器・甕	—	—	—	ナデ/ナデ	にぶい橙5YR6/4/ 橙5YR6/6	細、石英・長石少量含む	北区	表土・攪乱
8	弥生土器・壺	—	—	—	ヨコミガキ、ナデ/ヨコナデ	にぶい橙7.5YR6/4/ にぶい橙7.5YR7/4	細、石英・長石・ざくろ石含む	北区C1	6層
9	弥生土器・器種不明	—	—	—	調整不明/ナデ	にぶい橙7.5YR7/4/ にぶい橙7.5YR7/4	細、石英・長石少量含む	北区E4	3層
10	弥生土器・壺	—	—	—	沈線2条以上、ミガキ/ミガキ	浅黄橙7.5YR8/4/ にぶい黄橙10YR7/4	細、石英・長石・ざくろ石含む	南区B3	7層
11	弥生土器・壺	—	—	—	沈線1条以上、ハケメ後 ミガキ/ナデ	にぶい橙7.5YR6/4/ にぶい橙10YR7/4	細、石英・長石・ざくろ石含む	北区C2	6層・表土・攪乱
12	弥生土器・壺	—	—	—	沈線1条以上、ミガキ/ ナデ、オサエ	にぶい橙7.5YR6/4/ にぶい橙5YR6/4	粗、石英・長石・ざくろ石・角 閃石多量含む	南区B5	6層
13	弥生土器・器種不明	—	—	—	ハケメ/ケズリ、ナデ	橙5YR6/6/橙5YR6/6	細、石英・長石少量含む	北区	表土・攪乱
14	弥生土器・器種不明	—	—	—	ハケメ/ケズリ	にぶい黄橙10YR6/3/ にぶい褐7.5YR5/3	細、石英・長石少量含む	北区	表土・攪乱
15	弥生土器・器種不明	—	—	—	ハケメ/ナデ	にぶい褐7.5YR5/3/ にぶい褐7.5YR5/3	粗、石英・長石・角閃石含む	北区C1	6層
16	弥生土器・器種不明	—	—	—	ナデ/ナデ	暗灰黄2.5Y5/2/ 暗灰黄2.5Y5/2	粗、石英・長石・角閃石多量 含む	南区	廃土

第26図 包含層・攪乱出土遺物



番号	器種	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	石材	特徴	調査区	層位
17	打製石鏃	2.9	1.5	0.4	1.0	サヌカイト	平基式。	北区C2	6層
18	打製石鏃	2.1	1.4	0.3	0.5	サヌカイト	凹基式。	北区E3	6層
19	用途不明	12.1	2.1	1.1	42.1	頁岩	棒状を呈する。断面は三角形に近いが、刃部はない。	北区B0	6層

第27図 包含層出土遺物

(2) 石器（第27図、図版1）

打製石鏃2点、用途不明石器1点を図示した。打製石鏃（17・18）は2点ともサヌカイト製で、17は平基式、18は凹基式である。用途不明石器（19）は棒状を呈し、断面は三角形に近いが、角は鈍く、刃部は形成されていない。

（端野晋平）

文献

工楽善通，1991．水田の考古学．東京大学出版会，東京．

中村豊，2000．阿波地域における弥生時代前期の土器編年．田崎博之（編），突帯文と遠賀川．土器持寄会論文集刊行会，松山，pp.471-498．